

『詩 (07/27)』

聞こえますか
都会の詩が
聞こえますか
都会の唄が
聞こえますか
心の音色が
聞こえますか
哀哭の涙が

誰だって自由が欲しい
誰だって自由を大事にしたい
誰だって自由でありたい

聞こえますか
都会の音色が
聞こえますか
響きの音色が
聞こえますか
人々の音色を

みんな幸せを求めて

みんな生きている
みんな幸せを求めて

聞こえますか
哀哭の涙が
聞こえますか
心の音色が
聞こえますか
都会の唄が
聞こえますか
都会の詩が

『心 (07/27)』

明日を見ていないと
今日を生きられないから
夢を見ている

明日を信じていないと
今日を生きられないから
今を信じている

私の弱い心よ

過去を振り返るのも止そう
昔を思うのも止そう

たった一人の径
たった一人の生き
でも愛しい私の人生

私の小さき心よ

たった一人で歩いて
たった一人で死んでいく

明日を信じていないと
生きていけないから
今をいちぢずに見て

明日を見ていないと

生きていけないから
明日への希望を見て

『涙 (07/27)』

流れ出でる私の涙
幸せを夢に見て
夢をつかめず
流れ出でる私の涙

いつもいつも
私は置いてきぼり

今度こそはと
でももう終わってしまった

いつも私は
置いてきぼり

流れ出でる私の涙
幸せを夢に見て
夢をつかめず
流れ出でる私の涙

きつときつと
私にだって素敵な日が
訪れるはずだ

耐えて生きていれば
いつかいつか神様は
私に与えてくれる

『希望 (07/27)』

泣かないで
泣かないで
泣かないで
私の心よ
泣かないで
泣かないで
泣かないで
私の心よ

さあ心を開いて
希望を入れよう

痛まないで
痛まないで
痛まないで
私の心よ
痛まないで
痛まないで
痛まないで
私の心よ

なにもかも
さあ捨て去って

涙をふいて
涙をふいて
涙をふいて
私の心よ
涙をふいて
涙をふいて
涙をふいて
私の心よ

朝日がもうすぐ昇ってくる
もう昨日ではないのだから

『ボディ』 (08/10)』

嫌だよ人生
生きるのが
嫌だよ人生
生きるのが

痛む身体を引きずって
今宵も疼きに泣けてくる
あといくら生きればいいのか

いやだよ人生
いやだよ人生
生きるのが嫌になった
生きるのが嫌になった

早くゆっくりしたい
身体を痛みから解放したい
身も心も安堵したい

嫌だよ人生
生きるのが

嫌だよ人生
生きるのが

『駅舎』 (08/11)』

駅舎の白壁に夏の陽が映って
電柱やら電線やらアンテナやらの影が
尾を引いている
風が凪りその吹きに私は
秋の匂いを感じ取った

いや私だけではないだろう
木々も草花も
陽の当たる所も日影の所も
一様にそう触覚を
微かに感じているに違いない

夏の陽は燃えて影は長く
蝉の声は透り
蝶は畑の上を飛び
遠く山並みが大気に揺れている
私一人が列車を待っている

『眼』 (08/14)』

大きな犬が道の端を歩いている
人に遠慮するごとく上目ごしで
.....

堂々と歩けばよいではないか
なあ何を卑屈になって歩くのだ
人様と同じように歩けばよいだろう
人間が犬のように歩くか
悪さをする人間がいたら
うなり声を発して威嚇すればよい
打つ人間がいたら
その鋭い口で咬み付けばよいだろう
おまえの生きる権利を
どうして人間どもへ主張しない

道の端で乞食が酒を飲んでいる
陽を浴びて酒気の匂いが流れてくる
.....
風呂に入っていない垢の顔
ぼうぼうと老けた髪の毛
貴方にも子供の頃も有ったし
祝福された赤ん坊の時も有った
これからも乞食だろうし
一夜明けて王様にはなりはしない
夏はいいだろうが

秋は寒くなるだろうし
冬は冷たくこたえるだろう
人間どもがおまえを狩ることも
今心情はどうなんだ
酒気姿からは感じとれなくてね

道端の地蔵へ一心に祈るおばがいる
育てた子供への一心の安全祈願か
それとも
連れ添いの病の全快の願掛けか
.....

自分自身への祈りでないことが
祈れる背後下から感じとれるのです
そばの水溜まりの上を
音楽をはでに慣らした若者の車が
水をはねて去って行く
泥水を被っても手を合わせ黙祷している
ああああああああああ
私の母もこのように
私の無事を祈っているのであろうか
その夜私は泣きながら眠りに就いた

『涙 (08/20)』

明日に私が無事でいるかどうか
わからない
それが戦争なのです

人と人がどうして争うのか
私にはわかりません
きっと神様がそうしているのでしょ

この一紙紙が読まれているころ
私はこの世にいないでしょう
悲しまないでください

夕方に無事でいるかどうか
家族の誰もが安心できないでいる
それがいまの社会なのです

どうしてそうなってしまったか
誰もがため息をついている
己たちの生き様に因るのだろうか

家族が揃って夕餉を迎えるなど
感謝の祈りの賜ものでしょう
生きる確かさの燃える炎なのです

『生き (08/23)』

例えれば生きは
花か
例えれば生きは
小石か
生きは流れの中の
小枝

喜びは短く
苦しみは長い
涙は現実で
楽しみは夢

例えれば花のように咲き
例えれば石のように頑なに
例えれば流木のごとく
流れに身をゆだねる

悲しみは深く
喜びは浅い
心の痛みが現実で
心の安らぎは夢

生きは流れの中の
小枝
例えれば生きは
小石か
例えれば生きは
花か

End all 1996/08